緑 水 明かり

まちなみ体験ウォーク Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ & まちづくり市民トークセッション

金沢の豊かな景観を特徴づけているのは、丘陵地や段丘斜面の緑と、市街地を網の目のように流れる用水です。また、人々のライフスタイルの変化で、夜間の活動時間が延びている現代、安心・安全で快適な夜間景観と、歴史都市金沢にふさわしい品格のあるまちの明かりが望まれています。

こうした状況を踏まえて、金沢市では平成10年5月～10月にかけて、「緑」「水」「明かり」をテーマに3回のまちなみウォークを実施し、延べ440名の参加を得ました。

また11月にはまちづくり市民トークセッションを開催し、ウォーク参加者を含めた50名の市民が、まちづくりに関する意見や感想を率直に交換しあいました。

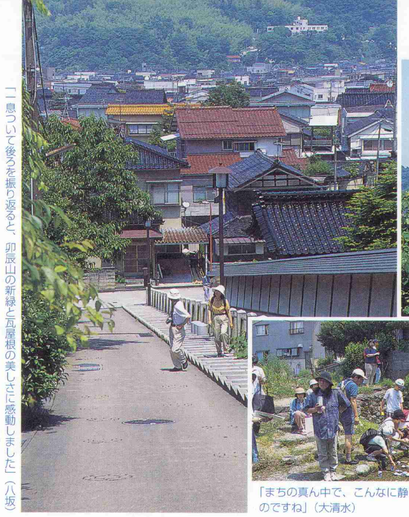
まちなみ体験ウォーク Ⅰ 新緑の中で坂道を歩こう 緑

新緑が燃え立つような5月23日、「十坂十色」をテーマに行われ、男性50人、女性70人の計120人、親子連れあり、熟年のグループありの多彩なメンバーが参加しました。

ウォークはスタンプラリー形式をとり、小立野台地の坂の上り下りを繰り返しながら、10カ所の坂をチェックポイントにして約8kmの道のりを歩くというもの。チェックポイントとした坂道は、加賀藩時代の重臣が娘を嫁がせる時に造った「嫁坂」や昔農民が草刈りに行く時に馬を引いて登ったところから名付けられた「馬坂」など、歴史を感じさせる名前が多く、参加者の興味をひいていました。

参加した人たちは、一様に「普段、車で通りすぎるだけでゆっくり歩くのは初めてなので、新しい発見がありました」と述べていました。また、昔と比べて「どの坂道もきれいに整備されているので、散策にもってこいですね」という意見が聞かれた一方、「整備が画一的で、人工的すぎるのでは」という声も聞かれました。

参加者たちはほぼ2～3時間かけて、金沢ならではの起伏の多い道のりの新緑のウォークを楽しんでいました。

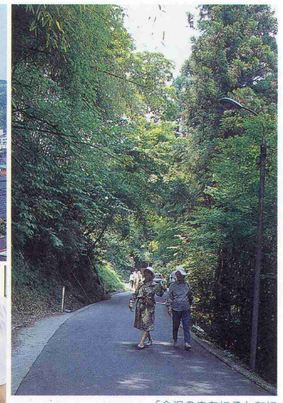


「一息ついて後ろを振り返ると、卯辰山の新緑と瓦屋根の美しさに感動しました」（八坂）

「古いまちなみと新しいまちなみが共存する、このまちが好きです」（宝円寺裏手）

「まちの真ん中で、こんなに静か。"オアシス"そのものですね」（大清水）

「スタンプの数を励みに、5歳の孫とゴールまで歩きました」



「金沢のまちにこんなにも素敵な坂道があったのですね」（椿原天満宮横）

まちなみ体験ウォーク Ⅱ 辰巳用水の流れを遡る 水

第2回ウォークは、初夏の日差しがまぶしい7月25日、辰巳用水の魅力発見をテーマに行われました。

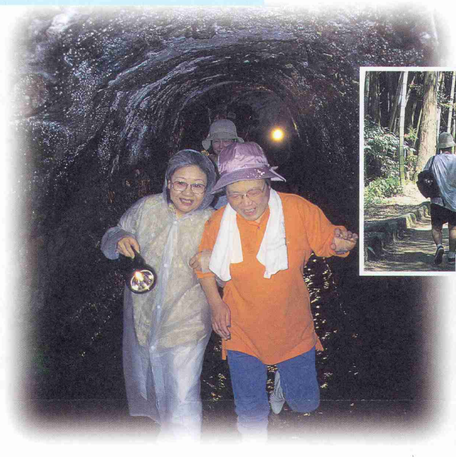
夏休み初日の土曜日とあって、小学生以上の親子24組、60名が参加。用水下流の中央公園に集合した参加者たちはバスに分乗して、開渠と暗渠を繰り返しながら流れる用水をたどり、源流へと遡っていきました。

果樹園が広がる市郊外に整備された辰巳用水遊歩道では、濃い緑が影を落とす用水沿いの小径を散策。あたりは市内とは思えないほど自然が残り、セミの脱け殻を見つけた小学生は歓声をあげていました。

さらに上流に遡り、犀川の取水口を見学した後、辰巳用水のトンネル部へ。当日は、偶然取水中止と重なったため、用水内部を見学できる貴重な体験ができました。

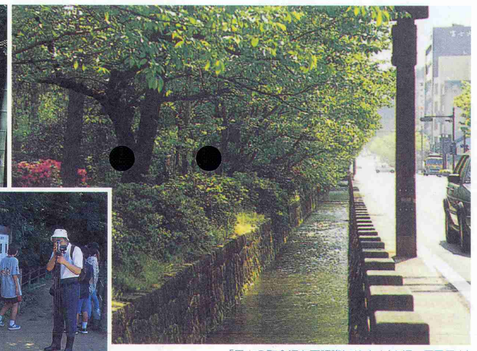
参加者たちは、合羽と長靴で身を固め懐中電灯を片手に、まっ暗なトンネルの中を恐る恐る進んでいきました。壁にはおよそ350年前にタガネで掘った手掘りの跡が当時のままに残っており、一様に江戸時代の人々の苦労に感じ入った様子です。

みな、口々に、滅多にできない体験に満足したと述べ、「用水の町金沢を再認識しました」「この場所を、これからもずっと次代へ残していってほしい」と語っていました。



「昔の人が手作業で掘った苦労がしのばれます」（用水トンネル内）

「この場所を、これからもずっと次代へ残していってほしい」（遊歩道）



「用水の町金沢を再認識しました」（広坂・辰巳用水）

「煙硝坂という名をはじめて知りました」

まちなみ体験ウォーク Ⅲ 夜の金沢の魅力を体感 明かり

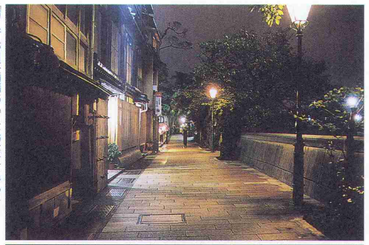
第3回ウォークは、10月2～4の3日間、金沢にふさわしい明かりを考えてもらおうと、照明メーカーなどの協力を得て開催され、延べ260名が参加しました。

参加者は、職場の同僚や夫婦、親子など年齢もさまざま。近代文学館前から、橋場町緑地までの約4キロのコースを、金木犀の香りが漂う夜の町を、三々五々歩いていきました。

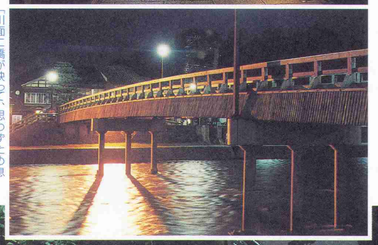
コース上では、城下町風情が色濃く残る長町武家屋敷や赤レンガ造りの玉川図書館、風情豊かな木造の梅の橋などが特別にライトアップされ、昼間とは全く違う姿を見せる町に足をとめ、見入る姿も見られました。

途中、江戸時代の町家建築が数多く残る尾張町の老舗交流館では、お抹茶とお菓子の城下町らしいもてなしがあり、また、「久保市さん」と呼ばれ地元の人に親しまれている久保市乙剣宮では丁度秋祭りが行われていて、雰囲気を盛り上げていました。

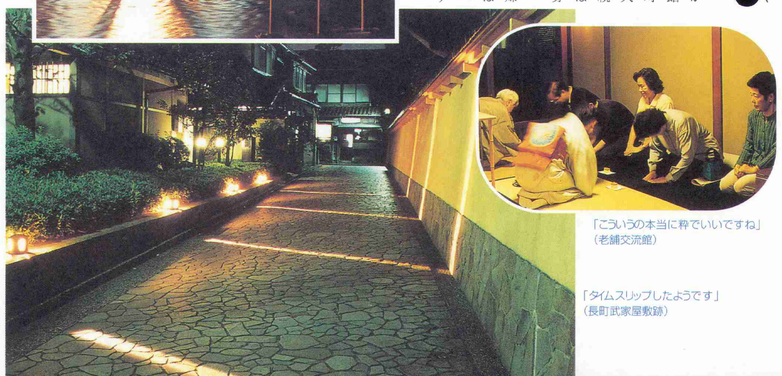
県外から参加したという夫婦は、「萩や仙台など城下町と呼ばれるところにはよく行きますが、金沢は規模も大きくきれいですね」と話していました。



「ガス灯が日本情緒あふれた家並みとマッチしていました」（日吉計画）



「川面に橋が映って、思わずため息のでる美しさ」（梅の橋）

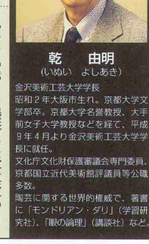


「こういうの本当に粋でいいですね」（老舗交流館）

「タイムスリップしたようです」（長町武家屋敷跡）

金沢らしいまちづくり

金沢の"アジェ"を待つ



乾　由明（いぬい　よしあき）

金沢美術工芸大学学長

昭和2年大阪市生れ。京都大学文学部卒。京都大学名誉教授、大手前女子大学教授などを経て、平成9年4月より金沢美術工芸大学学長に就任。

文化庁文化財保護審議会専門委員、京都国立近代美術館評議員等公職多数。

陶芸に関する世界的権威で、著書に「モンドリアン・ダリ」（学習研究社）、「眼の論理」（講談社）など。

私は大阪で生まれ、ずっと関西で暮らしていたが、二年余り前から縁あって金沢の大学に勤めるようになった。昔から金沢の街は大好きで、年に一、二度はかならず遊びに来ていたから、市内の地理は比較的よく知っているつもりだった。だがしばらく住んでみると、ほんとうの金沢らしいところは、何も知らなかったことに気がついた。大通りから一歩中へ入ると、狭い道が迷路のように複雑に入り組み、曲ったり折れたりして、ついには方角がわからなくなってしまう。今でもそういうところへ行くと、道に迷ってしまうことが多い。

しかし私には、ビルや商店が立ち並ぶ大通りよりも、くねくねと曲りながら続く狭い道の方がとても魅力的だ。古い金沢の民家や商店の風格のあるたたずまいが、そこにはまだ豊かに息づいているのである。戦前の美しい日本の街並が、現在でもこれほど生き続けているところは、ほとんどないように思う。しかもただ建物ばかりでなく、この狭い通りには、周辺に生きる人びとの生活の臭いがありのままに感じられる。観光客にはわからない金沢という街の素顔が、ここに見られるのである。

このような通りのなかには、武家屋敷がのこる長町やひがしの茶屋街のように、美しく整備されたところもあるが、私は、むしろ何でもない古い街並がのこっているところに、惹かれることが多い。たとえばいま私が住んでいる天神町あたりが、そのひとつである。かつては越中や福光からの街道に当るところで、そういうおもかげは現在でも見られるようだ。金沢美大のある小立野台の下の狭い道を散歩すると、一見平凡な街並が、心に静かにしみ込むような情感をたたえているのに気がつき、ハッとすることがある。しかしこの界隈にも、マンションなどの殺風景なビルが、しだいに増えてきている。

十九世紀末から二十世紀初頭にかけてのパリを撮影した写真家のアジェは、何の変哲もない街景を不動のイメージとして印画紙に定着した。最近の研究によれば、現在のパリは、アジェの撮ったパリとそれほど変っていないという。金沢の古い街並は非常に貴重だが、石造の建築の多いパリと違って、それは老朽化するとつねに簡単に破壊される危険にさらされている。しかしいまでもまだ、けっしておそくはない、誰か金沢の街の美しさを映像にのこしてくれる、日本のアジェはいないだろうか。

加賀藩時代の遺構を巡って城下町散歩

大野庄用水沿いには、藩政時代の情緒をしのばせる遺構が多数整備されています。

金沢市足軽資料館は、藩政時代の足軽屋敷2棟を移築再現したもの。館内には当時の生活用具などが展示され、つつましやかな足軽の生活を彷彿とさせます。用水を挟んで向かい側にある旧加賀藩士高田家跡は、五百五十石取りだった高田家の長屋門を修復したもの。敷地内には、見事な池泉回遊式庭園があり、音声アナウンスで当時の様子を伝えています。さらに用水の流れを遡ると、藩政時代からの薬種商、中屋薬舗を移築した金沢市老舗記念館があり、薬箪笥や帳場格子が当時の面影を伝えています。

晴れた日には、せせらぎを聞きながら用水沿いにゆっくりと散策してみては、いかがでしょうか？

金沢市足軽資料館

旧加賀藩士高田家跡

まちづくり市民トークセッション

11月29日の日曜日、金沢市文化ホールにて金沢のまちづくりをテーマに、ウォークの参加者を中心に50名が出席して開催されました。

今回は、フォーラムではなくトークセッションという初の試みを行い、子どもの参加に加え市の担当者もラフな服装で出席するなど、市民が発言しやすい雰囲気づくりを行いました。

セッションでは、スライドで各ウォークの概略を簡単に説明した後、ウォークの参加者の代表が意見を述べ、さらに全員で意見交換をしていきました。

ウォーク一については、「金沢にこんなに坂があるのに感動しました」という参加者の意見に続き、「坂の名前の由来が分かりますか？」という問い掛けに対し、町名の研究をしているという参加者からすぐに解説があるなど、活発に意見が交わされました。

ウォークⅡに関しては、特別参加した国際交流員のヨランダさんから、「金沢の用水はベルギーの用水に比べてきれいです」という意見も出されました。

また、ウォークⅢについては、アンケート結果から「大野庄」用水は水が少なく「車が多く歩いて残念だった」などといったきにくかった」などといったウォーク参加者の率直な意見が紹介される一方、出席者から「夜は別世界のようで素晴らしかった」という感想も聞かれました。

最後の全体の意見交換では、「辰巳用水で鴨がひなをかえすところをぜひ子どもたちに見てほしい」といった意見や、「浅野川沿いを風景を見ながらジョギングしたあと、主計町付近にある銭湯に入ることにしている」など様々な発言があり、会場からは笑いもまれ、セッションは終始なごやかな雰囲気で進められました。

セッションの終了後、金沢生れの金沢育ちという五十代後半の女性は「金沢というまちが本当に好きです。今日はあっという間に時間がすぎました。こういう風に意見がいえる場があるのはいいことですね」と感想を述べていました。